The Kinki Japan Society of Educational Audiology

# 近畿教育オーディオロジー研究協議会ニュース

http://web.kyoto-inet.or.jp/people/non007/

第２６号

発行日：平成 20 年（2008 年）/ 12/12

## 秋の講演会

平成２０年１１月１日、濵田豊彦先生（東京学芸大学:准教授）をお迎えして秋の講演会が行われました。
１１月初旬にしては暖かい日でしたが、当日参加も含め１３０名以上の先生方においでいただきました。濵田先生の熱い講演に参加者の先生方からいろいろな感想、ご意見をいただきましたので、ご紹介します。

## 参加者の感想

今回は自分が担当している子どもとのやりとりの参考になればと、テーマにひかれて参加したのですが、大阪のおばちゃんとの新幹線同乗記で始まった講演は、先生の気さくな人柄と会場と一体となったやりとりでアッというまの時間でした。

聴覚障害児の言語指導の困難さをわかった上での分析など現場の悩みをよく理解されているなあと思い聞き惚れていました。タイプ別の子どものとらえ方でも「う～ん・うん」と担当する子の顔を想い浮かべて、対人関係の整理のしかたなどの例にうなずき聞きほれていました。またスモールステップの作り方や４コマ漫画を使った例などダンボの実践も具体的で、明日からの力の素になった気がして、今日の講演会を聞けて感謝しています。（滋賀県：聾話学校）

今回の講演を聴いて、聴覚障害児は発達障害を併せ有する数が、聴児と比較してかなり高率に存在するという結果に驚きました。聴覚障害はコミュニケーションの障害でもあるといわれますが、アンケートの結果より、学習面において予防的な介入の可能性も考えられることから、幼少期からの継続したことばの学習における取り組みの重要性を改めて認識することができました。

ろう学校は発達障害を併せ有する子どもたちにとっては刺激の多い環境とも考えられます。しかし、その子どもにとっての困っていることを明確にし、分かりやすい授業の工夫や情報の整理の仕方について考えていかなければならないと感じています。（和歌山県：ろう学校）

私が大塚クラブや「ダンボ」のことを知ったのは、去年の夏、学部内で回覧されていた活動報告のパンフレットを読んだ時でした。普通の回覧物ならさらっと回すところを、ゆっくりじっくり、くり返しすみずみまで読みました。「こんなことをしてはるところがあるんや。いいなあ。もっと詳しく知りたいな。」と思い、手帳に花丸までつけたのをよく覚えています。ですから、今回の学習会で、濵田先生のお話を直接お聴きできたのはとてもありがたかったです。たくさん学ぶことがあった中の１つが「音韻レベルでつまずく聴覚障害児には、４歳児後半から５歳児の間にかな文字を早く正確に処理する力を身につけさせることが有効」ということや「５０音おっぱっぴー」でした。今年度から幼稚部に変わり、似たことを考え取り組んでいたので、さらに実践に活かしたいと思います。ありがとうございました。

（奈良県：聾学校）

集中が続かない、言語の定着が著しく悪い、人の気持ちが分からない・・・聞こえにくい子らの中にいるそんな子どもを見て、これは発達障害と見るべきなのか聴覚障害の２次障害と考えるべきなのか考え込むことがよくあります。このたびの濵田先生のお話をお聞きして、目の前の霧が晴れるような思い

をしました。頼りでもあり、悩みにもなり得るＷＩＳＣの扱い（ＰＩＱとＶＩＱの差のとらえ方を含めて）について貴重な示唆を与えていただいたこと、そして、聴覚障害の有無にかかわらず、それが有効であるなら発達障害的なアプローチで支援すればよいと教えていただいたことは非常に有意義でした。また、発達障害は試行錯誤の中からのみ、よりよい支援方法を見出すことができると考えられるが、それを「ダンボでしてあげる」というお話が感銘深かったです。いただいた教材を有効に活用し、私たちもその「試行錯誤」のお手伝いができればと思います。（兵庫県：聾学校）

「学習では説明できない無意識的な言語ルールの獲得こそが言語獲得の本質」というところに納得した部分と、学習で言語を獲得させている、この現状を変えることはできないなぁと思う部分とがあり、いろいろなことを思いながら講演を聴かせていただきました。言語指導をしている中で、こうだからこう、と説明できない部分が多く、それは本来無意識的に獲得される能力であるからだ、ということがわかりました。正直、それなら仕方がないな、結局学習しても限界があるのかなと思ってしまいました。でもそう思った一方で、学習で積んでいけるところは、やっていかなければいけないなと、改めて思いました。無意識的なルールの獲得の前に、学習で補えることがまだまだたくさんあるとも思いました。無意識的な言語ルールが学習によって獲得できたらどんなによいだろう、そんな方法があったらいいのになぁと思いました。今回、発達障害のある聴覚障害の評価と支援ということで、明日の授業に使えるテクニックをたくさん教えていただきました。それを試してみて、その子に合う支援を自分なりに探っていこうと思いました。指導意欲が喚起された、楽しく充実した講演でした。ありがとうございました。
（京都府：聾学校）

今回の濵田先生の講演を興味深く聴かせていただきました。学習では説明できない無意識的な言語ルールの獲得が聴覚障害児にとって困難である、ということは日々痛感しています。そこをきちんと指導しなければという思いで私も頑張っております。また、子どもに対する実践例のお話をされていた時の、子ども自身は「自分にとってとてもつらい活動をしている」「できないということは他の誰よりも本人がわかっている」といった言葉が心に響きました。聾学校に勤めている者としては、「できない」ことは、子どもよりも自分のほうがわかっており、そこをしっかり教育、指導しなければという思いが私自身にはあったように思います。しかし、「本人が一番つらい」ということを心に留め、もっと子どもの気持ちもくみ取りながら日頃の活動に取り組まなければならないと思いました。ダンボ用ｅラーニング教材についても、是非活用させていただきたいと思っています。（大阪府：聾学校）

## 今後の活動計画

平成２１年　１月２３日（金）　第３回代表委員会および専門研修会（京都府立聾学校）
２４日（土）冬の学習会（京都テルナ）
『乳幼児期からの難聴とその支援』
杉内　智子先生　（関東労災病院　医師）
『難聴児の指導と友だちや担任への難聴理解のための指導』
平島　ユイ子先生（福岡市立博多小学校）
３月中旬　集録の発行・機関誌２７号発行

**近畿教育オーディオロジー研究協議会事務局**

**事務局長　中井　弘征**

〒６３９－１１２２
奈良県大和郡山市丹後庄町４５６
奈良県立ろう学校内

ＴＥＬ：０７４３－５６－２９２１
ＦＡＸ：０７４３－５６－８８３３
メール：h-nakai@indigo.plala.or.jp